

## 第14回渋沢・クローデル賞 選考結果と授賞式

『絵画の黄昏—エドゥアール・マネ没後の闘争』前巻  
稲賀繁美（国際日本文化研究センター助教授）

1997年1月に名古屋大学出版会からの刊行助成により上梓した拙著『絵画の黄昏—エドゥアール・マネ没後の闘争』に対して、この度ルイ・ヴィトン特別賞を頂戴しました。筆者にとって、という以上に本書にとって、有り難いことと存じます。ご審査いただいた諸先生方をはじめ、お世話になった関係者の方々に、この場を借りて、あらためて御礼申し上げます。

ふと気がつくと、美術史という領域に足を突っ込んで、もう20年近くが過ぎました。卒論では透視図法（いわゆる遠近法）の日本への移入と変貌、欧州への再導入という軌跡を描き、修士論文では世紀末の宗教画家モーリス・ドニの、人口に膾炙した「新伝統主義の定義」にかんする常識を覆す仮説を提出しました。いずれも幸いなことに、その後フランスで活字になりました。遠近法の話は、前任校の三重大学でも、折りに触れてジュニアの学生さん相手に試みた話題です。ところが最近、なかに必ず「そんなの常識だ」と、ま



を過めます。

しかし、博士論文の副産物に過ぎない本書の未来は、未来の読者に委ねるべきでしょう。いつまで「困った奴」を演じるおつもり、と問われて不惑に感う暇あればこそ、あとはいかに優曇華の花らしきものを、なお許される月日のあいだに、どこぞの邸宅の柱に生み付けるか。吉凶はとにかく、そんな思いにかられます。かく申すも、つづいて「東洋趣味と日本趣味」、「モダニズムと装飾」という主題で、早急に残る雑稿を纏めなおす所存なりしゆえ。されど夢は枯野ならぬガレ場をさ迷い、容易に卵を植え付ける覚悟にたどり着きません。

先年、異色の比較文学読本『異文化への視線』（名古屋大学出版会）に執筆協力する機会を得ました。そ

せた返答をする学生が現われるに至りました。早いもので、新発見だったはずの私見は、いつのまにか大学新入生の「常識」へと転落していたわけです。修士論文の未熟な歴史哲学も、近年フランスの専門家から、批判されつつも言及はされる地位を得た様子。活字垂れ流しの横行する極東の極楽蜻蛉国とは一味違った、「学問の厚み」という蟻地獄に捕われた実験動物に、今更後悔はありません。

とはいえ、「絵画の黄昏」の中心的な仮説が、将来広く認知されるかどうかは、なかなかむずかしい問題だろう、と思っています。本書の主要な眼目は、マネの『草上の昼食』の「スキャンダル」なる虚構の「物語」の成立過程を浮き彫りにするにありました。とはいえ、この「物語」を「核」として「近代絵画の父マネ」という表象がマネ没後に確立した以上、いまさら「近代美術」[art moderne]（黒田重太郎から小林秀雄に至る世代の訳語）ないしは美術における「現代的性」[modernité] 発現の「核」のいかがわしさを言い立てて、どうなるというのでしょうか。ここで、勤勉なアリを食べる巧妙なるアリジゴクが、どうして成虫になるとただの「薄馬鹿下郎」に変身するのか、という疑問が、イソップ物語の弁証法よろしく、時折脳裏

の続編を、『異文化接触の倫理』（仮題）として、今世紀のうちに編みたい、という不遜な野望もあります。フランス最新流行輸入代理店の自己満足でもなければ、日本からの国際情報発進基地を気取る伸び上がりとも無縁な回路。日本語に自足せず、ヒエラルヒーにも世俗権力にも無頓着な回路を開くのが、今の奉職先での責務だ、という意識もあります。個人の利害から離れた日本研究者の領域越境ネット・ワークをいかに組み上げて活性化させるか。その試みに暗中模索で今から8年取り組めば、任期制導入に伴い、次なる奉職先探しを待ち受けている様子です。末筆ながら、受賞作の編集を担当された橘宗吾氏、7年間身勝手にもお世話になった三重大大学の同僚諸氏への感謝を申し述べることをお許し下さい。